
助手席に座って

かるしうむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

助手席に座って

【Nコード】

N39190

【作者名】

かるしうむ

【あらすじ】

主人公「私」は夢をみる。「私」が助手席に座っていて、「あなた」という人が運転している夢。しかし夢から醒めた「私」が座っているのは新幹線の座席で、「あなた」はいない。

「私」は新幹線で東京から京都に行き、「かずや」と一緒に過ごす。「私」が抱える過去と思いが、「かずや」との新しい日々の中でほぐれて、織り交ざり、変化していく…。

1 夢（前書き）

訪問いただきありがとうございます。

この小説は、自分自身の経験や想いをつなぎあわせて書いています。初小説なので至らない点も多々あるかと思いますが、少しでも読んでいただけたら幸いです。

1 夢

- 私が助手席に座っている、あなたが運転している。どこにくんだろ、行き先は分からないけど、それは私を不安にしない。助手席に座っている、あなたが運転している、それが私を安心させるから。
- -

目を開ける。明るく白い壁。青色の椅子。「ゴー」という、うるさくもなく、静かでもない一定の音。

新幹線。新大阪行き。2列シートの、窓側。

私はそこで、夢をみていた。助手席に座っている、夢。あなたが運転している、夢。

でもそれは、あり得ない現実を想像だけで作り上げた夢じゃない。それは、思い出を材料に作り上げた夢。

私は夢の中で、思い出していたんだ。私が助手席に座って、あなたが運転して、いつもどこかに行っていたのを。行き先が変わっても、車の中の空間は変わらなかった。その助手席には、家に帰って布団にもぐったような気持ちよさがあつた。行き先がどこでも大丈夫。助手席に座っているから。あなたが運転しているから。

それを、思い出していた。新幹線の中で。ここは、助手席じゃない。あなたは、いない。

左隣の見知らぬおばあさんは縫い物をしている。黙々と。黙々と。孫にあげるのか、自分で使うのか。どこかの民族が身につけていそうな、原色と原色がギザギザに並んだ模様を器用に形作っていく。おばあさんのぬくもりとにおいが、冷たくて硬い針に連れられて、布地の中にススツと縫い込まれていく。その温かさに、甘えなくなる。そのおいに、包まれたくなる。でも、できない。すぐ隣に

あるのに、とても、遠い。

おばあさんと反対側を向いたら、窓。夜の街が、左から右へ、過ぎていく。いや、本当は、街はじつとそこに居てくれているのに、私がもの凄い速さで通り過ぎている。家の灯りが、車のランプが、焦点も合わせられない間にどんどん、どんどん遠くに行つて、記憶に刻むこともできない。

「かえりたい」

心がつぶやく。あの灯りも、この灯りも、私の帰る場所じゃない。だから、どんどん目の前から去つていく。その灯りに照らされている人が、うらやましい。どこかに、かえりたい。

ただ、窓を見つめる私だけが、そこで静止している。時間も景色もおばあさんの針も、すべて進んでいくのに、私だけが置いて行かれる。

2 やさい

京都駅。新幹線は滑らかに止まる。誰も傷つけないように。そつと撫でるように。

「なんでそんなにやさしくするの?」「誰にでもそうするんでしょ?」

心がつぶやく。何言ってるんだろう、新幹線に向かって。いいや、新幹線に向かって言ったんじゃないよ。あの人に向かって言ったの。これから会うあの人。

足下に置いていた鞆を持ち上げる。おばあさんがそれに気付いて針と布地を懷に寄せて足をすばめる。

「すみません」

久々に口を開いた。今日起きてから、初めてかも。声帯が寝ぼけていて、音がかすれた。私は立ち上がって、おばあさんの前を通る。窓の外の景色が通り過ぎていったのと同じように、おばあさんも私の視界から消えていった。

座席と座席の間を抜けて、ドアを出た。雑踏が私を出迎えて、新幹線はまた、そつとやさしく出発する。

鞆から携帯電話を取り出して、メールを打つ。

「いまついたよ」

送信しました、の画面が出る前に歩き出す。改札を出て、駅の建物も出る。

ずらーっと並んだロッカー。自動販売機。バス乗り場。人ばかり。やってくるタクシー、去っていくタクシー。

出会い、別れ、出会い、別れ。カップル、友達、家族、同僚、笑顔、悲しそうな顔、喧嘩中？、、、。

人と人のつながりが、めまぐるしく駆け抜けて、少し頭がクラクラする。

「ささえて、ほしい」

また、心がつぶやく。私が立っている足の面積しか、私の居場所がない。そこには、留まらない。杖をなくした老人のように、フラフラしながら進む。はやく、何かに包まれない。ひとりでは、立ってられない。

よるめく私の身体に、振動が響いた。携帯。着信。長い、電話だ。画面を見る。か、ず、や、の3文字。

「もしもし」

本日、2回目の発声は、やっぱり喉がひつついてうまくでない。

「もしもし着いた？もうすぐ駅やから、タクシー乗り場のところで待ってて。ナンバーは831やから。ほなね。」

エンジンのノイズと、オーディオから流れる何かの曲、それをかき分けて聞こえてくる声。か、ず、や、かずやの声。

「はあい」

私の返事と一緒に電話が切れる。向かうべき目的地を与えられた私は、杖をもらった老人、くらいの足取りになって、ひたひた、タクシー乗り場まで歩く。

8、3、1、や、さ、い、かなー。やさい、やさい。やさいはどこかな。かずやはどこかな。

頭の中で歌いながら、流れていく車の中に目をやる。タクシー、タクシー、普通の車、タクシー、普通の車。831、831、、、。

831！あ、かずや。

番号と彼の顔がほぼ同時に視界に飛び込んで、車はあつという間にすぐ目の前にきて、ドア越しに彼がこっちを見てる。うれしいのか、こわいのか、すこし心臓がキュツとなって痛い。自分の顔の筋肉がかたまってるのも分かる。どんな顔してんだ、私。

ただ反射的にドアを開ける。

「おつかれさん」

彼の声とともに、さっき電話越しに聞こえた世界が、わっと私の周りに広がる。ノイズ、曲、それと、さっきは分からなかったにいい。車の？彼の？何がどう混ざったのか分からない、初めて嗅ぐにいい。

「ありがとう」

足下に鞆を置きながら、目線も足下に落としながら私は言った。

さつきキュツとなつた心臓が、ほんの一瞬フツと緩む。その隙を突いて、熱い血液がどつとこぼれだして身体を走る。焦ってまた心臓がキュツとなる。

「いえいえ、わざわざ東京から大変やつたな。」

「新幹線乗ってただけだもん、大変なことないよ。それよりかずやこそ、わざわざお迎えありがとう」

「どういたしまして。ほな、どうしようか。ご飯食べた？」

「まだだよ」

自分の脳と声帯が自動操縦に切り替わつたみたいに、どぎまぎする心を置いてきぼりにしてしゃべりだす。その冷静な声とは裏腹に、全身をぐるぐる駆ける血液に熱せられて、頬がお餅みたいにプーッと火照る。照れてるの？焦ってるの？私。彼が私のほうを見てるのはなんとなく分かる。でも顔は上げられなかった。

「何か食べたいものある？」

「なんでもいいよ」

なんでもいいよ、なんて、早速面倒くさいヤツと、思われたかな。でも正直、今お腹がすいているのかもよく分からない。血液は一通り身体中をめぐって、皮膚がフワフワして、全身にホッカイ口貼つたみたい。

「ん、ほなとりあえず家に向かって走るから、途中でなんかいいお店あったら寄ろうや」

「うん」

カチツと音がしてウィンカーの点滅音が始まった。車が動き出す。合流するために運転席の後方を見るかずやのうなじを、やっと顔を上げて私は見た。

タクシーの群れにまぎれて、831の看板をつけたかずやの車が走っていく。新幹線から見た過ぎ行く灯りの一部に、今やっと自分も溶け込めた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3919o/>

助手席に座って

2010年10月18日21時42分発行